

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は、高校生の長期欠席、中退、原級留置等について、量的データ（公式統計）に加え、スクールソーシャルワーカーの立場から面接調査、事例研究及びフィールドワークを駆使した質的研究法によってその関連性を捉え、ベン図を用いて視覚的に表したところに独創性がある。スクールソーシャルワーカーは東日本大震災以後注目され始め、現場への導入も各地で行われているものの、まだその数は少なく、調査データも公表されていない。特に、高等学校におけるスクールソーシャルワーカーの配置は明らかにされておらず、本研究者も千葉県で初めての高校に配置されたスクールソーシャルワーカーとして実践的研究を行っているという点で新たな取組といえる。また、高校教育現場に自らが入り込むことによってしか明らかにできない教員への面接調査、事例研究及びフィールドワークが本研究の中核となっており、高校教育現場と研究をつなぐ点で意義のある内容となっている。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

学校教育における実践的研究（臨床研究）は、日々変化する子どもたちと、それに向き合う教員たちとの相互作用を捉えようとするものである。従って、これまでの量的データを中心とした仮説検証型研究ではなく、面接調査、事例研究及びフィールドワークなど質的研究法から仮説を導き出す仮説生成型研究による新たな研究法も必要であると考えられる。そうした点で、学校教育現場で日々変化していく様々な事象を捉え、その実態から背景にある問題点を見出し、その課題の解決方法を探りながら、具体的な提言を目指した本研究の手法は、学校教育臨床という新たな研究分野において妥当と考えられる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究は、公式統計からの量的データを質的に分析したうえで、それだけでは捉えきれない長期欠席、中退、原級留置等の実態を、教員への面接調査、生徒の事例検討及びスクールソーシャルワーカーとしてのフィールドワークによって収集し、その質的データを分析検討するという手法を用いており、教育現場の実態を捉えるという点で、学校教育臨床研究として適切なものである。

また、個人の事例を含めて質的データが豊富に使われている点、そのうえでデータの取り扱いと個人情報保護について十分に注意を払っている点でも評価できる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では全日制普通科高校（教育困難校）から高校生が排除されていく要因について考察した上で、教育現場での生徒の実態をもとに、生徒を包摂するための高校の在り方について結論（具体的な提言）を導きだしている。高校教育における、「準備教育」と「完成教育」、「能力主義」と「平等主義」、「義務教育」と「非義務教育」といった交錯した論点を見直し、ひとつの結果として「完成教育」の必要性を導き出した点でも一貫性がある。

また、第2章第1節と第2章第3節においては、日本臨床心理学会の学会誌に掲載された論文に

基づいて構成されており、他の章も含めた本論文全体は、十分に学術的な水準に達している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究により初めて、高校におけるスクールソーシャルワーカーの立場から、高校教育現場における生徒の長期欠席、中退、原級留置等が生じるプロセスが捉えられ、全日制普通科高校（教育困難校）から高校生が排除されていく要因が明らかとなった。また、教員への面接調査とそれに基づく生徒の事例検討、及びスクールソーシャルワーカーとしてのフィールドワークから実態を捉えて分析検討したことは、学校教育臨床分野の研究として十分な意義があると認められる。さらに、それらのきわめて具体的な分析検討を通して行われた全日制普通科高校（教育困難校）における対策と、今後の高校教育の在り方を提言したことは、本研究の重要な成果として認められる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員は全員一致で、本学位申請論文は東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に相応しい優れた研究であると評価した。